

指導資料



鹿児島県総合教育センター

外国語科英語 第69号

- 中学校・特別支援学校対象 -

平成23年4月発行

4技能を統合的に活用させる言語活動の見取り - 学期単位の統合的な活動を通して -

平成20年告示の学習指導要領の趣旨を反映し、外国語科においては「聞くこと」「読むこと」を通して得た知識等を自らの体験や考えなどと結び付けて活用し、「話すこと」や「書くこと」を通して自らの考えを相手に伝えることが可能となるように、4技能を総合的に育成する指導が重視されている。そのため、4技能を統合的に活用させる言語活動(以下「統合的な活動」とその評価について具体化することが大切である。そこで、本稿では、統合的な活動を学期単位において設定し、生徒の成長の度合いを見取る評価の在り方について述べる。

1 統合的な活動の指導とその指導例

統合的な活動とは、4領域を互いに関連付けた活動のことである。新里^{*1)}(2008)を参考に、授業における統合的な活動の指導(表1)と指導の具体例(表2)を挙げる。

表1 統合的な活動の指導

ア	「聞く、話す、読む、書く」の順による語彙・文法指導
イ	4技能を関連付けた教科書本文の指導
ウ	現実の言語使用につながる authentic な活動における指導
エ	スピーチ、ディベート、プロジェクトワークなどの指導

表2 統合的な活動における指導の具体例

指導場面	指導例
新出の語句の指導 ア ウ	絵、対話の中で音声と意味の結合を図る。(L) 意味ある対話で練習させる。(L&S) 音声を文字で確認させる。(L R) 書かせる。(W)
新出の文構造の指導 ア ウ	状況を示しながらOral Introductionを行う。(L) Q&Aで理解を確かめる 文字で示す。(L&S R) 繰り返し練習させ、内在化を図る。(S) 生徒自身の情報をその文構造で書く。(w)
教科書本文の指導 イ エ	CD等での聞き取り、または読み取りをさせる。(L,R) 内容理解の確認、要約、再生等をさせる。(R S,W) 生徒自身が内容について考えさせ、発表させる。(S,W)

2 学期単位の統合的な活動の意義と年間指導計画

学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」では、各学校の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3年間を通して英語の目標の実現を図ることとされている。中・長期的な目標に基づく言語活動の設定においては、個別の言語材料の理解や運用という視点だけではなく、教科書を用いた指導を前提に、使用する言語形式を学習者が主体的に選択し、相手との自然なコミュニケーションの中で互いに意思疎通を図る言語活動とすることが大切である。

外国語の習得においては、統合的な活動を長期間に繰り返し行うことによって、

学習した言語材料を用いた表現の能力及び理解の能力がより向上する。したがって、言語材料の理解を深め、定着を図る言語活動を各単元で行うとともに、学期を見通し、学習事項に基づく4技能を関連付けた言語活動も有効である。

言語活動を計画するに当たっては、学期を通して生徒にどのような力を身に付けさせたいかを主たる目標として設定し、教科書で取り扱う言語材料、言語の使用場面、言語の働き等を考慮して具体的な課題を設定することが重要である。

また、題材の選定においては、教科書題材の他、生徒がかかわる学校行事と関連を持たせることなども重要な視点である。下の表3は、このような点を考慮した学期単位の統合的な活動の年間指導計画例である。

3 学期単位の統合的な活動の評価

平成22年5月に観点別学習状況の評価についての考え方が示された。次は、その観点及びその趣旨である。

《コミュニケーションへの関心・意欲・態度》
コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとしている。

《外国語表現の能力》
外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。

《外国語理解の能力》
外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。

《言語文化の知識・理解》
外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともに、その背景にある文化などを理解している。

評価の実際に当たっては、各学校の創意工夫を生かしながら目標に準拠した観点別学習状況の評価を着実に行うこととされている。

各学校においては、平成14年度に国立教育政策研究所から例示された指導目標の分析や評価規準の設定例に基づき、単元ごとの観点別学習状況の評価が行われている。主たる目標に基づく評価規準を設定することにより、単元の指導の見通しや振り返りができるため、この手法は大変重要である。

表3 学期単位の統合的な活動の年間指導計画例

学期	活動名(時)	主たる目標	統合的な活動	評価方法	
第1学年	2学期	自己紹介(2)	5文程度の自己紹介ができる。	参考文例を聞き、話す。	活動の評価(観察) テスト(記述)
	3学期	私の身近な人(2)	身近な人物を紹介することができる。	他の紹介を聞き、参考にして話す。	活動の評価(観察) テスト(実技)
第2学年	2学期	修学旅行で学んだこと(3)	読んだことなどについて読み手を意識して書くことができる。	先輩の作品等を参考にし、自分の情報を書く。	作品の評価 テスト(記述)
	3学期	将来の自分(2)	必要な情報や理由を添えて自分の考えを書き、スピーチすることができる。	参考となる作品等を読み、内容等を参考に書き、スピーチを行う。	活動の評価(観察) 作品の評価 テスト(記述)
第3学年	1学期	日本を見つめ直す(3)	自分の持っている情報を正しく伝えることができる。	品物の説明を聞き、参考にして書く。	活動の評価(観察) 作品の評価
	2学期	自分の考え人の考え(2)(ディベート)	根拠を基に意見を述べたり、相手の言ったことについて賛否を述べたりすることができる。	論題について書き、分かりやすく話す。 相手の意見に応答する。	活動の評価(観察) テスト(実技)

指導時期は、表現に必要な文法事項の学習状況や語彙、文構造などの習熟の程度に応じて適切に定める。時間数は本活動であり、事前に短時間で継続的な指導を数回行う。

前述の学期単位の言語活動の評価においても、目標とする文章や談話のレベルを具体的に示した上で、言語知識等がコミュニケーションの中で活用できるのかを適切に評価し、その結果から生徒個々の伸びを実感させるなどして有効な指導につなげたい。

4 統合的な活動と評価の実際

統合的な活動の評価においては、身に付けた知識や技能を、実際のコミュニケーションの中で運用する学習課題に取り組みませ、適切な評価規準を設けて評価する必要がある。その際、それぞれの生徒がどの程度目標を達成したかを、言語活動の終了時だけでなく、言語活動の過程においても評価することで、指導者、生徒ともに能力の伸びを確認することができる。

ここでは、第2学年3学期の「将来の自分」を取り上げて、統合的な活動とその評価の実際について述べる。この活動は、2学期から3学期にかけて学ぶ文法事項等を考慮して、3学期の適切な時期にスピーチを行わせる言語活動である。

(1) 指導期間

1～2月に、約10分の指導を8回程度行い、3月にスピーチの時間を2時間とする。

(2) 目標と評価規準等

ア 主たる目標

必要な情報や理由を添えて将来に向けた自分の考えを書き、スピーチすることができる。

イ 評価規準

《コミュニケーションへの関心・意欲・態度》
聞き手が理解しやすいよう工夫したり、つなぎ言葉を効果的に使ったりしている。

《外国語表現の能力》

- ・ 10文程度のスピーチを、ねらいとする表現を活用して作成することができる。
- ・ 適切な声量や明瞭さで、自分の考えをまとまりよく話すことができる。

《外国語理解の能力》

まとまりのある英語を聞いて、要点を聞き取ることができる。

《言語文化の知識・理解》

スピーチ文の組み立てや、必要な語句、表現、文法などを知っている。

ウ モデル文

Hello, everyone. I'm going to talk about my dream. I want to be a physical therapist. I have two reasons.

First, I met a wonderful physical therapist when I was twelve. He took care of me very well. I want to be like him.

Second, I want to help sports athletes. I like soccer. A strong soccer team needs a good physical therapist. I want to go to the FIFA World Cup with Japanese soccer players.

If I am a physical therapist now, I can help our members of the school team. I think it is great. Thank you for listening. (13文 100語)

(3) ねらいとする言語材料

具体的な場面や状況にあった適切な表現を生徒自らが考えて言語活動ができるようにするために、次のような表現を提示し、選択できるようにしておくことが大切である。

ア 題材に関すること

自分の希望を表す表現

I want to be a florist.

I want to work for a car company.

理由を表す表現

I want to be a cartoonist because I like comic books.

I have two reasons.

First, ~. Second, ~.
物事のきっかけを表す表現
(以下略)

イ スピーチの形式に関すること

最初のあいさつ
Hello, everyone.
Good morning.
スピーチの題材の発表
I'm going to talk about my dream.
Do you know a physical therapist?
スピーチの終わり
Thank you (for listening).

(4) 活動の進め方

モデル文にあるように、10文100語程度で、将来の希望やその理由等について、スピーチの形式で原稿を書き、発表できることが大まかな目標である。

実際の指導に当たっては、モデル文を提示してそのまま書かせるのではなく、文のまとまりごとに少しずつ、音声で理解し、表現したことを書いてまとめていく統合的な活動を組み込んだ学習過程をとる。次はその指導の流れと評価の重点である。1～2月の8回程度の継続的な指導において、スピーチの内容を作成し、3月の本活動(2時間)においては、聞き手を意識した

	主な領域	言語活動	評価
10分間の指導(2月)	聞くこと	教師や先輩のスピーチを聞いて、メモをとり、内容等を参考にする。	理解
	書くこと	ペア活動等で対話した内容をまとめ、書く作業を行う。	表現言語
2時間の指導(3月)	話すこと	作成した英文を聞き手を見ながら伝えるように話す。	コミュ表現
	話すこと	スピーチを聞いた感想を述べたり質問をしたりする。	コミュ表現

スピーチを実際に行う。

(5) 言語活動の見取り

4観点からなる評価規準に基づき、各観点ごとに詳細な基準を定め、観察等で評価することよりはむしろ、主たる目標にどの程度到達したかについて、表3のような到達段階を作成し、生徒に自分の段階を示しながら指導するとともに、評価の判断基準にすることが実践的である。

表4 目標に対する到達段階

ア	将来の自分について、1～3文で表現できる。
イ	将来の自分の希望やその理由を添えて、4～6文で表現できる。
ウ	将来の自分の希望を理由、その他の情報を含めて7～8文で表現できる。
エ	スピーチの言語形式を意識し、将来の自分の希望を10文程度で表現できる。
オ	将来の自分について、10文程度のスピーチを、聞き手が理解しやすいように、工夫して表現できる。

おおむね満足すべき状況は、オの段階であり、生徒全員をそこへ到達させるように指導を行う。この段階を超えるパフォーマンスが行われた場合は、十分に満足できる状況にあると判断する。

以上述べてきた、学期単位の統合的な指導とその評価については、各学校で、組織的な取組を推進し、生徒の到達目標を明らかにするとともに、学習評価の妥当性、信頼性等を高めることが重要である。

【参考文献】

- 1) 新里眞男『いま、4技能を統合的に教える必要性—そして、さらなる技能も!』英語教育4月号、2008、大修館書店
文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』平成20年9月
平田和人編著『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』2008、明治図書
本多敏幸 著『到達目標に向けての指導と評価』2003、教育出版

(教科教育研修課)